
仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

本郷一刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 幻想郷／原点の風が幻想入り

【Nコード】

N5414X

【作者名】

本郷一刀

【あらすじ】

かつて、世界の裏を操作していた秘密結社『ショッカー』を壊滅させた

4人の改造人間たち、そのショッカーの恐怖が『幻』となった今、若きライダーの闘いが再び・・・

第巻話『再び駆け抜ける風』

少し前まで、「シヨツカー」という組織と戦っていた戦士たち中で、プロトタイプ唯一試作品の戦士がいた。その戦士は、他の3人の戦士とは別の道に進み、学生として暮らしている。しかし、そんな平和は、長くは続かない。平和にするまでは時間がかかるが、平和を壊すのは一瞬だ、その一瞬を彼はのんびりと過ごしたかっただけだった。それは人々の心からシヨツカーの恐怖が「幻」になっていた時のことだ。

―やっと落ち着ける生活を送れるようになった、風見さんや本郷さんは教師として一般人の中に紛れ、一文字さんは各地に飛んでカメラマンとして活躍しているなか俺はただの学生として紛れ込んでいるが、落ち着かない。また何か起りそうな気がして仕方ない。

「北郷君、おはよう」

「ああ、おはよう」

とそっけなく返事してしまう。自分が嫌だが、あの日以来あんまり人とかかわりたくない、俺はもう、ホッパープロトタイプ01として改造されてしまったあの日からだ、まったく俺は、あの人たちには追いつけない。

「ねえ・・・少し遊ばない？」

「へ？」

不意に背後から声をかけられ、振り向くが誰もいない。空耳かと思

い振り返ると、美しい女性が、目玉がたくさんある空間から上半身を出していたが周りは気付かない。というよりも周りの人がいないそして、俺までその目玉だけの空間に吸い込まれていた。

「ここはどこだ！ ショッカーの一員か！」

「いいえ、違うわ、むしろその逆、あなたの力が借りたいの」

「……力を……どういう事だ」

「貴方達が戦っていた敵がちょっとこっちに来ちゃって残虐を始め
てね、私達でも手に負えないの」

その言葉で脳裏をよぎったのは、目の前で殺された家族の姿だった、
そして同じ思いをしてる人がいると考えると怒りがこみ上げてきて、
顔の傷が少し浮かび上がっていたらしく、
相手は少し表情を変えていた。

「分かった、だが相棒^{バイク}も連れってけよ」

「解ってる」

意志の決定は思いのほかあっさりとしていた自分に驚きを隠せない
でいる。だけど、迷いがない方が幸せかもしれない。脳改造をショ
ッカーの面白半分でされなかった俺にとってはだけど……

第貳話『闘いは再び』

俺が目的地に着くとそこには、シードラゴンが人を殺そうとしていた。しかし、すでに何人が殺したらしくシードラゴンに血が付いていた。赤く鮮やかな血と黒く染まった血が、

そして、シードラゴンは転んだ子供を絞め殺そうと近づいてくる。子供は恐怖でその場で泣き始め逃げようにも足がすくんだらしく動けない。そこに蒼い服を着た女性が子供を抱きかかえるが、シードラゴンはすでにその背後にいて手の触手を伸ばそうとしていた。

「はああああ!!」

「ぐ・・・貴様はホッパー01!」

「久しぶりだな、ショッカーの怪人、さあ君はその頃連れて早く」

「ああ、どこのだれか知らないが助かった。」

「礼はいらないよ・・・さあ残りの2体も出てこいよ」

女性が遠くに行ったのを確認し、シードラゴンの残り2体を見つけ出す。

そして、徐々に俺の体が装甲で覆われ、ヘルメットの様に仮面を付け戦闘準備は終わり相手に向かって走る。

.....

あれ？あの人かず君？でも雰囲気違うけど、かず君だ、
なんで幻想郷に？って変身した！？あれって確か仮面ライダー旧1
号？

ベルトも白いし、目も白いし、身体は黒いし、赤いマフラーだし、
あつ混乱してきたけどとりあえず避難誘導しないと！

.....

シードラゴン1の頭をつかみ、支点として使い身体を宙にあげてそ
のまま相手の頭を砕き、その体をシードラゴン2にぶつけて、飛び
上がり相手にライダーパンチを浴びせる

「ライダーパンチ、二段返し」

シードラゴン1，2を破壊した北郷ライダーはそのまま逃げようと
する、シードラゴン3を捕まえ情報を聞こうとサイクロンで轢き飛
ばし捕まえる

「さあ貴様のボスはどこにいる？」

「俺たちは、そんなことを貴様などに言うものか！」

「言いやがれ！」

「ふん、ヒントをやろう、怪人は俺たちを含め、10体だ、10体
だけでもここは征服できる！！」

と言に残したあと相手は爆発した。ショッカーは証拠を残さないた
めに怪人たちを爆破し、強い酸で溶かす。用済みの処分に関しては
徹底している。

「消えたか、あと7体の怪人か、スパイダー、バット、コブラ、スネーク後の3体は誰なんだ？」

と疑問を残しながらも変身した姿からいつもの姿になり、あたりを見回すがショッカー戦闘員の姿すらなく、怪人単独の行動とみていいらしい。ただ久々の戦いのせいで、リジェクション（定期的に血液を交換しないと起こる拒絶反応）のような現象に見舞われる。

「具合はあまり良くないみたいね」

「半年のブランクがあるからね……でも心配されるほどでもないから大丈夫だよ……えっと名前は？」

「八雲紫よ貴方は北郷一刀、またの名をホッパープロトタイプ」

「いや今は仮面ライダーとして都市伝説になってるよ」

「でどう？相手の人数は解った？」

「ああ、とりあえず後7体の怪人がいるってことだけ」

その後一刀は被害の確認をしに行った。死者13人、負傷者30人と少ないような気がするが、この里にとっては大きい被害である。

「あのさぁ八雲さん俺の家はどこになるんですか？」

「あっそれならいいところがあるわ！」

と言われ、サイクロンごと「スキマ」と呼ばれる物を通り、目的地に着いたが何時もスキマにはあんなにも目玉があるのだろうか？気

にしちやいけない所かもね。

「到着」

「ここどこ？」

「貴方の知り合いがいる所なはずよ」

「知り合いってかもうこんなに日が暮れて帰り大丈夫ですか？」

「心配してくれてうれしいけど大丈夫よ、きちんと先に連絡したから大丈夫だからはいりなさい。」

「了解、ふう、失礼します」

「はい」

「どうも八雲さんからここでお世話になれと……ってさなちゃん!？」

「かずくん!？」

「おや、一刀じゃないか」

「神奈子さん!？」

と意外にも昔仲良くしていた親子?（一刀支点）がそこにいた。そして見たかった微笑みが見れたことで今まで感じなかった物を久々に感じた。がそれと同時にまた戦いの渦にみを通すこととなる意味でもある。

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』

束の間の平和というほどでもないが、個人的に満足している。がしかし、何で思い出話

しかも恥ずかしいのばつか話すんですか!?

「いやゝ早苗が五歳のころ二人で、迷子になった時、私を見つけて早苗は大泣きして、一刀はそのまま、早苗を泣かないようにしてくれたっけ」

「それは昔のことです」

「そうですよ……」

「でも中学のバレンタインの時なんかさあ、他の女から一刀を守ってねえ、自分の部屋に逃げ込んだときはちょっとひやひやしたけどね」

「あれは俺も驚きましたしちょっと……」

「「ちょっとって何かな?」」

しまった!墓穴掘った!?!さすがに神様に嘘言うのもまずいし、どうしたらってかさなちゃん頭からめっちゃ煙出てるよ!?!俺でもそんなことできないのに

「葛藤してるねゝ相変わらずでよかったけどね」

「はい?」

「諏訪子悪いけど今ショート中な早苗を早苗の部屋に連れてって」

「はいよ」

さなちゃんを連れて諏訪子さんはこの部屋を出て行った。そして神奈子の顔はさっきまでの笑顔とはちがい真剣な表情になりこちらを見るそれに合わせて俺も真剣な顔にする

「でいつからそうなっちまったんだい？」

「貴女達が行方不明になった日の次の日に貴女方を探しに神社のあった場所から帰る途中でした。シヨッカーに捕まり、その後このような体にされ、あいつ等の気まぐれで、脳改造はされずに済んで、1号と共に脱出しました、その後は1号を抹殺しに来た2号、V3と共にシヨッカーの怪人軍団を壊滅させました。がまさか、こんな事になっているなんて」

「ここは幻となったものが来る場所、それ故に善悪は問わないからね、ただ今回に関しては紫にも手が負えない状況になっちゃっただけさ」

「それで俺をここに・・・っ!？」

激しい痛みと共に吐血するような感覚が俺を襲った。今までに無いほどの辛さ、どうしてだ?なぜここに来てからこれが起こる!・・・はっ!?! シードラゴンは囧か!?!

あいつらに俺達ホッパーだけに作用する毒を仕込んでおいたのか!?!

「大丈夫かい?」

「ええ、あいつら俺たちの誰かが来ることは予想してたらしいです、毒を盛られました、すみません」

「毒！？知り合いになんでも医者がいるから、紹介するよ」

「いえ大丈夫です。並みの人間じゃないですし、これは俺達ホッパ―殺害用の毒だと思います、それにさなちゃんには内緒にしてください。」

「ああ、早苗の事だ、お前を絶対に戦わせないだろう。」

「ええそれと、早速敵が来たようです。」

「え？」

改造された俺には分かるこの音は・・・バイクしかもこのタイプだと、シヨツカーライダー軍団、数は4機、やれる！

「神奈子さんは、隠れてください。俺がやります！」

「いやここは私も出るよ」

「ならこの防衛をおねがいします。俺の帰る家でもあるので」

と言うと顔の手術跡が浮き上がっていたのを見ていないのに気付きそのまま、俺は変身し外で、シヨツカーライダーとの戦闘に映った。

.....

・・・

「ホッパーP1を確認、コレヨリ、殲滅スル、行くぞ」

「「「・・・」」」

無言のままショットカーライダーたちは目の前の仮面ライダーにミサイルダーツを投げるが、すべて蹴り返されるまるで、ここを守ると言ってるかのような行動だった。

そして爆炎の中から現れるライダーに向かってくるショットカーライダー達・・・

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』（後書き）

次回、ショッカーライダーとの戦いを始めるライダーは連携攻撃に苦しむが、そこを助けたのは！？

第四話『弾幕炸裂！仕留めろライダーキック！』

目の前のライダーたちは4体・・・いや4人だな、敵の装備はダーツ爆弾か、だが確かこいつらは6人1チームだ。一体何処に隠れていると俺が思っているとやつらの後方から出てきた、そいつらの口が開き炎を出してきた。

「・・・・・・・・丸焼きかよ、ごめんだね」

というと相手の中に飛び込み両脇の2体に受け身を取りながら蹴りを決めて怯ませ、その後正面の4体に向かって走り相手の腕を後ろに捻じ曲げ動きを封じたその直後、そのショットカーライダーもろとも俺に爆弾を投げてきたが俺はかろうじて回避に成功したもののショットカーライダーは見事に爆散した。

「お前ら昔からそうだな。脳改造されなくて良かったぜ」

「まだ間に合うぞホッパーP1」

「お前は結構喋れるようだな」

御互いパンチで相手を殴ろうとするが拳同士がぶつかる、プロトタイプは俺は2'8tしかないが相手は3tだ、正直フレームが悲鳴を上げてるが俺はそのまま相手の空いた右腹に浴びせ蹴りを決めて、その場から離脱するが、相手は両サイドから攻めてきて防御するが正面がガラ空きになってしまい相手のキックを受けて弾き飛び、膝をついてしまう。

「これで終わりだ・・・・・・・・ウグォ!？」

「!?!?・・・何だ今の光は？」

「・・・・どうだい？これがこっちの喧嘩の仕方「弾幕ごっこ」さ」

「無理しちゃだめですかずくん！」

「相変わらずむちゃするね。でもこの土地は私たちの思い出があるんでね、被害が少ないうちに終わらせようよ」

振り返ると3人の人間・・・・いや2人の神様と1人の人間が「弾幕」を撃ちショットカーライダーを倒した。これで戦いは楽になると判断した一刀は立ち上がり、風の力を借りたようにそこに立ちそして風がベルトの風車を回し力を与えてくれ、さっきまで身体を襲っていた痛みを取り除いてくれた。残る敵4体はそのまま走ってくるが、一刀は天高く飛び上がり、中央の敵を捕らえ

「ライダー・・・・キック!!」

「ウゴォオ・・・・」

―地面には身体を貫かれたショットカーライダーは、そのまま活動を停止してその場に倒れむ。残りの3体はすでに弾幕によりベルト部分を破壊され、弱っていた。

そして、一刀はきりもみシュートを使い3体を粉々にして戦いを終え、変身を解き

3人の方に向かって行った

「・・・・・・ありがとうございました。」

「どういたしまして、向うだと他のライダーがいたと思うけどこっちでは私たちがチームだよ。」

「おっ、さすが恋する乙女！」

「さすが幼馴染！」

「二人とも茶化さないでください！」

―本郷さん、一文字さん、風見さん、ここでのチームが早速出来ました。3人は1人で戦う重圧に気付いてくれたのかは、解りませんが、仲間ができるって嬉しいことですが、同時に辛い事なんですね。

「さあ、寝ようか」

「奇襲があったら・・・」

「大丈夫、起こすし、気付くよ」

と笑顔で言ってくれる神奈子さんの言葉に甘え、疲れを取るため睡眠をとることにした。

こうして俺の長い1日が終わると思っていたが、まさか寝室がさなちゃんと相部屋だとは緊張したけど疲れていて、そのまま寝た。けどもなぜか朝起きるとさなちゃんがすぐ横で俺の腹を抱きしめて寝ていたため、動けなかったのはまた別の話

第五話『ライダーキックが効かない？鉄壁の怪人登場』

―あの日以来ショッカーの動きは無く、5日が過ぎていた。あまりにも静かすぎだ。

神奈子さんは天狗や妖怪たちから情報を集めてくれたが、まさか本当に妖怪たちがいるなんて、そういやさなちゃんが言ってたっけ？
「この幻想郷では常識に囚われてはいけない」って、苦労したんだなあ……

「おっ、どうだった？射命丸さん？」

「あやや、気付かれましたか、しかしながらショッカーの情報及び隠れ家は見つかりませんでした。」

「そっか、ありがとうございます。」

「で、取材は受けてくれるんですね、ね！」

「は、はい……（剣幕上げえさすが取材陣……じゃなくて記者さん）」

その後取材を1, 2時間答えた、後諏訪子の手伝いとして神社の屋根を直していた。がそこへ、また客人がやってきた。

魔法使い？魔法少女？どっちだこの女の子は？やべえ、さすが幻想郷ぶっちぎるなあ

「よう！あんたが噂の仮面ライダーか？」

「ああ、そうだけど着地するなら地上にしてくれないか？ここ直したばかりだからさ」

「あいよ。」

聞き分けのいい子だ、さなちゃんの昔のころ見たいだな、元気あるし聞き分けいいし

「って思い出にひたらずに、とう！」

すちやと音が立ったがまあ敵はいないんだし気にしない。・・・
気にしたというか居やがった！

「さなちゃん離れて!!」

「はい？きゃっ!？」

と真上をかすねたのは虹色の光でスパイダーは飛んで行ったがしかし！

「家壊すな!!でもサンキュー!サイクロン!!」

サイクロンはスパイダーをこちらの足元まで弾き飛ばし、一刀はそのまま相手をつかみ神社から離れた所で戦いを始めた。

「お前が来たってことは、他にも怪人が」

「ああ、俺たちは一人一人ではかなわないが2人ならどうだホッパ
ーP1」

「あぶねえ!?!」

「シザーズジャガー外すな」

「次はしとめる」

「いやな組み合わせだな（ジャガーは最後にしたとしても倒せるか?）」

俺の居た世界ではシザーズジャガー相手に本郷さん、一文字さんのタッグで何とか倒せたようなもの、俺一人で今の状況を何とかできるか? いや、何とかするんだ!!

「ハアツ! テエヤア!!」

パンチとチョップをスパイダーに当て、ジャガーに蹴りを浴びせていると上空から岩のような塊が降ってきた。

「何だ!?!」

「シザーズジャガー、スパイダー貴様らは、総統が呼んでいる。」

「このダンゴムシが!」

「まてスパイダー一旦引くぞ」

「ああ」

「なんだ? ダンゴムシールド?」

「なんでわかったし」

「いや、明らかに盾付けてるし……」

「まあいいだろう。俺がここで作られた怪人、1番目だ!」

「ぐはっ!？」

何だこいつのタックル!？体中のフレームが痛むぜなんてカッコつけてる場合じゃねえ、堅い故に強か!まるでボールのように弾かれ、地面を滑空し、岩に身体が当たる。

「……ツウ、今度は……こっちの番だぜ!、ライダー!!パンチ!!」

「その程度かホッパーP1？」

「なっ!？確かに決まったはず!」

「貴様のスペックは俺より下だ、時代遅れの失敗作が」

「ライダーキックが通用しない!？」

キックもパンチも効かない相手に一刀は、立ち向かう術を考えながらも敵の攻撃を回避していた。

（あの両手の盾さえなければ……いや、盾があっても行けるけど八雲さんの力が必要だ……どうする?俺?）

と考えていた矢先、相手はチェーンアレイを出しそれを使って攻撃

してくるのをかわしたと思っていたが鎖が腕に巻き付き、地面に叩きつけられる。がその鎖は切られ、怪人も弾幕を浴びて後退する。

「ふう・・・今は客人のか？」

「客人じゃなくて普通の魔法使い、霧雨魔理沙さ」

「かずくん大丈夫!？」

「何とかな、悪いが八雲さんの力を借りたいから連れてきてくれな
いか? 出来るだけ早く」

「人使いの荒い奴だぜ」

「解りました、魔理沙さんよろしくお願いします。」

「えっ、ちょ、もう決定かよ、解ったよちょっと待ってな」

「ああ、何とかする。さなちゃん弾幕で牽制しておいて!」

「でも動ける明らかに仮面取れかかってるけど」

「平気さ、（しかし、まだパワーがうまくまとまらねえ）」

――八雲宅のふすまから漏れてくる声を魔理沙は聞いていた。それは
一刀にかかわることだった。

「なあ、それは本当なのか？」

「ええ、悔しいけど彼を元々は幼馴染に会わせるためだけだったけ

どまさかショックがここに来るなんて、御蔭で彼に寿命を削らせることになるなんて・・・」

「でも、なんていったけ？リジェクション？は起きてないけど」

「彼の場合は、例えるなら蚊が血を吸うようなものよ」

「つまり、気付かないうちに蝕まれてるってこと？」

「ええ、彼の場合すでにチャージが遅くなりつつあるはず」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414x/>

仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

2011年10月27日12時01分発行